

今、文学を学ぶということ

実社会に生きる資質・能力が求められるようになっていく現代、教室で文学を学ぶ価値とは、どんなところにあるのでしょうか。

文学を愛し、各界で活躍される五人の方のエッセイ、四人の実践者の先生方の言葉を通して、文学の価値、私たちの人生との関わりについて考えます。

文学で培う健全な批判精神

脳科学者 中野信子

現実とはまったく違うストーリーを仕立てあげて偽装し、犯人が事件を起こす。刑事はそのストーリーを信じ込み、別の人間に疑いの目を向ける——推理小説の多くは、伏線やミスリードを使って構成され、読者は自ら推理をしたり、それが裏切られたりすることを楽しむ。この営みには、人間が物事を認知するときの「ゲシュタルト知覚」という特性が関与している。

例えば、次のような記号が紙に描かれていたとする。黒丸が横並びに二つと、その下にU字型の円弧が一つ。多くの人はこれを見て、即座に「顔」を連想するだろう。しかし、これは顔ではなく、ただの記号の集まりだ。にもかかわらず、人はそれを全体として捉え、顔だと認識してしまう。この認知のしかたが、ゲシュタルト知覚である。私たちの脳は、「物語」を勝手に作り出してしまうのだ。

少ない情報をもとに、より多くの情報を簡単に処理するために、ゲシュタルト知覚

は効率的かつ必要なものである。しかし一方で、この機能は、人の思い込みや錯誤を招き、誰かの嘘に惑わされるという危うさをも併せもっている。これを回避すべく、私たちの脳に備わっているのが、共感・想像・良心・抑制・長期的な展望などの思考をつかさどる「前頭葉」の働きだ。ただ、前頭葉は発達に時間がかかり、その機能は、小学校高学年ぐらいから、三十歳ごろまでかけてようやく完成する。

前頭葉が発達していく時期には、その発達を促すような働きかけを行うことが肝要となる。その働きかけとはすなわち、多様な人々に共感したり、他者の心情を読み取ったり、意図を読み取ったりするなどということだ。文学とは、言語によって伝えられた人の思考の、解釈のしかたについての議論を交わす領域である。つまり文学こそ、まさに、前頭葉を鍛えるために大きな役割を果たす実学なのだ。

好きな小説の外伝を書くのもいい。読む

ことに苦手意識があるなら、アニメや漫画のノベライズを読むというだけでもいい。前頭葉が未発達な中学校時代には、文字情報から意味を構築する経験を大いに重ねることが重要だ。そして、ゲシュタルト知覚のみにとらわれず、前頭葉を働かせて、この世界には虚構というものがあること、現実には幾通りもの解釈がありうるということとを理解してほしい。その積み重ねによって、これからの社会をつくる子どもたちには、ぜひ、健全な批判精神を培ってもらいたい。(談)



1975年、東京都生まれ。医学博士。東日本国際大学教授、横浜市立大学客員准教授。東京大学工学部卒業後、同大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。脳や心理学をテーマに研究や執筆の活動を精力的に行う。『脳はどこまでコントロールできるか?』(ベストセラーズ)など著書多数。

文学は「稼ぐ力」の源

投資家 藤野英人

十代の頃からたくさんの文学に触れる体験は、人生をどこまでも豊かにしてくれる——。子どもの頃に大量の本を読み、大人になってからは投資家として「人を見極める」経験を重ねてきた私は、そう強く確信しています。

きっかけは小学三年生の頃、教育熱心だった両親が「課題図書」として私に与えた200冊の本でした。専門家のお薦めという古今東西の名作が突如積まれ、「感想文を書かなければ食事は出さない」というやや乱暴な方法で、私は強制的に文学の世界へ足を踏み入れたのです。

シェイクスピア、トルストイ、マーク・トウェイン、志賀直哉、森鷗外。小学生には早すぎる本を、お腹を満たすために無理やり読んでいましたが、200冊を何往復かするうちに、だんだんとその世界に引き込まれていきました。

特に好きだったのは井上靖の『あすなろ物語』。新聞記者のライバルどうしが筆を

闘わせる描写を読みながら、「大人はこんなにカッコいい世界を生きているんだ」とワクワクしたのを覚えています。

時には運命の恋人に出会う青年になり、時には百万の軍隊を破る名将となり、時には浮気性の旦那に苛立つ妻になり。人生経験などない十代そこそこの私が、文学を通じて濃い人生を追体験していました（相当、ませた子どもだったはずです）。

文学で描かれるのは人間そのもの。決してキレイには割り切れない、矛盾した感情の複雑性や両面性を垣間見ることに、「人を複眼的に見て、寄り添える力」が養われたように思います。

「人に優しくありなさい」と教育するためには、ただその言葉を繰り返すのではおそらく足りない。さまざまな立場の人間の背景や内面を知る体験が不可欠だと私は思います。文学はその役割を担うはずです。物語という、心躍らせる引力に乗せて。

そして、文学によって磨かれる「共感

力」は、そのまま「稼ぐ力」と直結します。

なぜなら、世の中のビジネスというものはすべて、人が心から求めるものを満たすことで成り立つからです。世界の名だたる企業の経営者の多くが読書家であり、独自の哲学を語る教養を身につけていることも、それを証明しています。

教室で文学に出会う体験は、世界を無限に広げる入り口。せっかく同じ作品を皆で読むのですから、何をおもしろいと感じたか、ぜひ語り合ってほしいと思います。そこに正解は決してなく、感性の違いを認め合える時間こそが尊い学びになるでしょう。



1966年、富山県生まれ。レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役社長。早稲田大学卒業後、国内外の資産運用会社勤務を経て、2003年同社創業。投資に値する会社かどうかを判断するため、23年間で約5700人の社長を取材。著書に『投資家が「お金」よりも大切にしていること』（講談社）など。

「わかりにくさ」で会話をしたい

詩人・小説家 最果タヒ

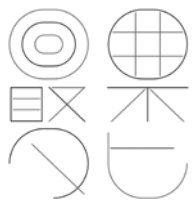
うまく説明せよ、と言われる。思ったことについて、考えていることについて。きちんと説明し、私を納得させなさい、と言われる。会話とは、そういうことの繰り返しであるように学生時代は思っていた。コミュニケーションをうまくとりなさい、協調性をもちなさい。けれど、なぜ私が思ったこと、考えたことを、他者に納得してもらわなくてはいけないのだろうか？ そう思ってしまったことはどうやったつもりで変わらぬのに、言葉を尽くして、わかりやすくせよと言われる。わかりやすくしなければ、納得してもらわなければ、私の感情はなかったものとして話を進められてしまう。十代の頃、私はそういう危機感に、言葉で対抗しようとしていた。

あのころ、ブログを書きつづけていた。それはまったくわかりやすくはなかった。支離滅裂だったし、直感的で、納得なんてされないものだ。けれど単純な言葉に当てはめて、言えたような気になって、曖昧だ

けれど自分だけの感性で感じていた部分を忘れていつてしまうよりは、言葉でその曖昧さを曖昧さのまま書いてしまいたかった。それを試み続けたかった。どんなに「わかりにくい」とか「意味がわからない」と言われても、「私はあなたではないので意味がわからなくて当然では？」という気持ちになる。なぜ人は他人を「理解できる」と思い込んでいるのだろう。理解できなかったとき、「相手の努力が足りない」とどうして思うことができるのだろう？ 違う人生を生き、自分が見てこなかったものを見てきた人のことを、理解できるわけもないし、だからこそ会話をしたいと思うのではないの？ 私は、よくわからないことを言う人たちに、「君の話はよくわからん」って言いたかったし、私もそう言われたかった。それでも相手の話を聞いていたかったし、自分も話していたかった。だから、私はブログを書いてきたのかもしれない。それは後々「詩」と言われるようになり、雑

誌に投稿したり本を出すことで、私は結果として今、詩人として働いている。

きつと今でも、自分の作品が「わからない」と言う人の方が大多数だと思っています。「わかった」と言う人も、私の思うままに受け止めたのではなくて、その人が思っていたことをその中に見つけ出したのだと思っています。そしてそれは、私が夢見ていたひとつの「会話」なのだと思う。言わずにいた、わかりにくくて、とりとめもなく、曖昧な、でもその人だけの気持ちで、私の詩によって引き出されていくのだとしたら、そんな幸せなことではない。私にとっではそれが、詩を書き続ける理由です。



1986年生まれ。2004年、インターネット上で詩作を開始。08年、第一詩集『グッドモーニング』（思潮社）で中原中也賞、15年、詩集『死んでしまう系のぼくら』（リトルモア）で現代詩花椿賞受賞。最新詩集『天国と、とてつもない暇』（小学館）、小説集『十代に共感する奴はみんな嘘つき』（文藝春秋）など著書多数。

